

聴覚障害ソーシャルワークにおける ろう文化視点と文化モデルアプローチの有効性に関する考察

A Study of the Effectiveness of Deaf Culture and Cultural Model Approach for Social Work with Deaf and Hard of Hearing People

原 順 子

Hara, Junko

要旨

手話をコミュニケーション手段とする聴覚障害者には、独自の文化としてろう文化（Deaf Culture）があるといわれている。このろう文化を基盤とする文化モデルアプローチは、聴覚障害者を従前の医学モデルや病理モデルといった聴文化からの視点ではなく、ろう文化視点での障害者観により、聞こえないことをポジティブに捉えることができると考える。本稿では、ろう文化が聴覚障害者にとって重要な捉え方であることを、先行研究のレビューにより明確にする。また、文化モデルアプローチで聴覚障害者を捉えることで、ネガティブな捉え方がポジティブに転換できることを示し、文化モデルアプローチの有効性を明らかにする。

キーワード：聴覚障害ソーシャルワーク、ろう文化視点、文化モデルアプローチ

1. はじめに

障害がある人たちの障害の捉え方や障害者観は、障害の社会モデルの登場や ICF（国際生活機能分類）、さらに障害者権利条約や障害者基本法等の法制度において大きく変遷してきている。聴覚障害者への視点についても他の障害種別と同様に変化してきているが、とりわけ聴覚障害者については手話をコミュニケーション手段とする独自の文化、すなわち、ろう文化（Deaf Culture）を基盤とする捉え方が指摘されている（木村・市田 1995, Lane 1999 = 2007, Ladd 2003 = 2007, 木村 2007, 2009, 渋谷 2009）。

筆者は、聴覚障害者を対象とする相談支援（＝聴覚障害ソーシャルワーク）の専門性についてこれまで研究しており、聴覚障害ソーシャルワークの枠組み、聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンスを抽出し、ろう文化を基盤とするアプローチを聴覚障害ソーシャルワークにおける重要なアプローチと捉えることを提言してきた（原 2015, 2016）。具体的には、ろう文化の構成要素について明らかにし、そして、聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテ

ンスを異文化間ソーシャルワークや聴覚障害ソーシャルワークの先行研究と比較し、独自の専門性を構築した。文化モデルアプローチに関する研究課題としては、文化モデルアプローチの概念を明確にし、且つ、その有効性を論じることが残されているが、本稿では、ろう文化を基盤とするアプローチに関する先行研究のレビューと、筆者がおこなったワークショップのデータから文化モデルアプローチの有効性を論じることとする。

用語の使用に関して筆者の考えをここに示しておく。聞こえない人については主として聴覚障害者と表記するが、内容に応じてろう者を使う場合もある。勿論、引用文献等においては、使用されている表記をそのまま使用することになる。また、本稿のテーマであるろう文化については、手話を第一言語として使用するろう者について論じることになるが、難聴者や中途失聴者がろう者としてのアイデンティティを持つ場合もあるため、混乱を避けるためにも主として聴覚障害者を使用する。

2. 医学モデル・病理モデルから文化モデルへ

2-1. ろう文化の捉え方とその実態

ろう文化について考察する前に、まず文化とは何かを明らかにする必要がある。しかし、文化についての文献をレビューすると、文化の意味はあまりにも曖昧模糊としたものであることがわかる¹⁾。文化人類学領域においても文化に関する研究は多様な視点で論議されているが、文化人類学の父と呼ばれる Tylor, E. B. によると、「文化とは、知識、信仰、芸術、法律、慣習および人間が社会の一員として獲得したすべての能力と習慣を含む複合的全体である」（日本文化人類学会 2009：77）と定義されている。

しかし、「文化の範囲は極めて広く、教養から知識、信仰、意識、言説、芸術、価値、道徳、習慣、伝統まで含める広い概念であり、グローバリゼーションの深化に伴う文化的課題をターゲットとする研究もある」という（渡辺 2015：vi）。また、文化に関する研究領域には心理学的文化研究もあり、「社会文化心理学」「文化・歴史的活動理論」といった新しい心理学の流れもある（山本 2015：5）。「文化の定義については議論百出で、……文化の現われは、選択される比較の文脈によって多様であり、その意味で恣意的で主観的なものである……」（山本 2015：12, 23）との説明もある。どの範囲の人とどの程度のレベルで一致できるのかは、取り上げる現象または対象によっていろいろあるが、少なくとも比較の文脈が定まれば、その文脈の内部では何がより適切な文化なのか、あるいは正しい文化なのかということを議論することが可能になり、そして一定の合意に達する可能性も感じられるようになる。文化というのは、そういう立ち現われ方をする現象であるともいわれている（山本 2015：23-24）。ということであれば、本稿において述べるろう文化に関する研究視点は、聴者の文化である聴文化と聴覚障害者のろう文化との比較における研究であるといえよう。

また、他の障害種別における文化的考察として、「盲文化」や健常文化に対する障害全般を対象とした「障害文化」もある。障害問題が障害概念と表裏一体のものであることを考えると、障害問題が異文化間に生じる偏見・差別や抑圧等であるとしたなら、それは障害概念においても文化モデルというべき障害概念が必要であるとの捉え方もある（手賀・澤田 2015：85）。

しかし、純粹に文化を語れるのは、やはり「ろう文化」だけであると筆者は考えている。その理由は、ろう文化には手話という独自のコミュニケーション言語があるからであり、海外の文献をレビューしてもろう文化に関する論文は多数ある。ろう文化の構成要素も明確に提示されており、研究者によりその構成要素の捉え方に若干の差はあるものの、共通しているのは視覚的なコミュニケーションである「手話」が言語として構成要素に位置付けられているということである（原 2015：34）。独自の言語が存在するということは、独自の明確な文化の存在を指摘することができる。

次に、ろう文化について考察する。ろう文化とは聞こえない人々の限定的な「顕著な社会的集団」の事象を表す用語であり、この現象は伝統的には「デフコミュニティ」「デフワールド」と言われてきたものであるという（Leigh 2009：14）。聞こえない人々は、はじめはデフコミュニティとして一体化し、聞こえるか聞こえないかに焦点をあてていた。聞こえる人びとの世界とは、言語やコミュニケーションにより対極の存在であった。やがてデフコミュニティの概念は、手話使用者、音声言語で話す聴覚障害者、難聴者、そして手話通訳者である聴者にまで対象者を広げて受け入れるようになり、彼らはコミュニケーションアクセスに関することや、聴覚障害者に対する尊厳を獲得するといった共通の目標を達成することを目指すようになったという。反対にデフワールドはろう文化のメンバーとしてのアイデンティティのみを含んでいるという。

また Leigh によると、ろう文化の概念は、“Deaf in America：Voices from a Culture”（Padden & Humphries 1988）の本が出版されてから普及していったという。独創性に富んだこの本は、「聞こえないこと」は「聴力損失」ではなく、ろう者の世界を中心において書かれたものであった。例えば、赤ちゃんが生まれたろう者の親が、自分の子どもが聴覚検査を受けた場合の表現として、「聞こえのテストに不合格だった」ではなく、「聴覚障害の検査に合格した」と報告するといったことなどがその例として紹介されている。聞こえない人たちはアイコンタクトや体の動き、ASL（アメリカ手話）といった視覚を重視する。最終的には、ろう者との社会的関係、学校、社会的グループや組織、家族やインフォーマルな関係を通して、文化的言語的信念や価値の確信を発展させていくことになる。ろう者として生きるあり方といった共通の理解が、物語や文学、劇場、ビジュアルアートを通して表現されているという（Leigh 2009：14-15）。

以上のろう文化に関する言説はアメリカでの話であるが、ろう文化に関することはアメリカにおいて発生・進展したとイギリスの研究者である Ladd は指摘している。ろう者の集合

的な生活の記述に関連して「文化」という語が最初に現れるのは Stokoe らの著作 (Stokoe et al.,1965) の中であり (Ladd 2003=2007:367)、また、イギリスで最初にろう文化を明確に言及したのは、1981 年の Brien の論考であるという (Ladd 2003=2007:371)。

ろう文化と他の文化との相違点については、Parasnis (1996) が次のように述べている。聴覚障害児の親がろう者であるのは約 10%であり、ろう学校内で聞こえない者同士、すなわちピア同士でろう文化を伝え合い、親から子へといった垂直に伝播したり継承したりはしない。これらはゲイコミュニティと同様であるとの指摘もある。ろう文化や ASL に関して、両親から子どもへの縦の伝達がほとんどないという理由で、ろう者としての自己同一性と集団同一性の発展には長いプロセスが必要となり、多くの聴覚障害者はろう学校の寄宿舎で同じ仲間から文化規範や ASL を学んでいるということはよく知られていることである。親から子どもへの縦の伝達より、同じ聴覚障害者同士から文化の伝達を受ける強いピアネットワーク (peer network) が形成されている。

聞こえない親をもつ聴者の子どもである CODA (Children of Deaf Adults) については、Padden (1989) が次のように指摘している。CODA はろう者の文化に接しやすく、ろう者の価値観を共有している。CODA がろう文化の成員になることができる要因は、ろう者の文化集団の言語を知っていることが最大の要因である。ろう者と接する時に用いる行動様式は、聴者という時に使う行動様式とは違い、使用する言語、冗談、視線の使い方を変えなければならないことに CODA は気付いているという。

以上、ろう文化に関する基本となる内容を先行研究より説明した。

2-2. 文化モデルのろう文化視点

以上のように、ろう文化が聴覚障害者の独自の文化であると認識されるようになり、従来の聴覚障害者への医学モデルや病理モデルから、ろう文化を基盤とする文化モデルに転じてきたのである。障害者観全般の視点も同様であるが、従前は、障害は治療すべき対象であり、社会にとって良くないものとの認識である医学モデルや病理モデル、本来備わっているべきものが欠けているという認識では欠損モデルといった捉え方がされていたが、社会が変われば障害をめぐる状況が変わってくるという社会モデルや、本稿での論点である文化モデルが登場してきた。

Lane は医学モデル (または医療の対象者としての聴覚障害者) の視点は、聴覚障害者を依存的役割をもつ患者と見做し、クライアントであるという聴覚障害者をパターンリズムでの見方を反映すると指摘している (Lane1990)。聴覚障害者への相談支援をおこなっているソーシャルワーカーを対象に筆者がおこなった質的調査においても、「依存的になりがちな聴覚障害者への対応力」が求められるというソーシャルワーカーのコンピテンスが抽出されている (原 2015) が、聴覚障害者への社会の側の認識が医学モデルや病理モデルであれば、クライアントは依存的になりがちな存在になってしまうのである。

従って、医学的、心理社会的な障害者として聴覚障害者をみるソーシャルワーカーは、リハビリテーションや心理社会的な援助が必要だと考えがちである。対照的に、ろう文化での視点では、聴覚障害者は手話という音声言語とは違った言語をもち、独自の教育、社会経験、価値、習慣をもつ人たちであるといった文化モデルとして捉えることができる。

わが国においては残念ながらろう文化研究は盛んであるとはいえないが、欧米では Deaf 関係の文献には必ずと言ってよいほどろう文化に関する記述がみられる。例えば、2016 年に出版された “Deaf Studies Encyclopedia” には Deaf Culture の項目があり、ろう文化についての記述がある (Holcomb 2016)。

3. 文化モデルアプローチの有効性

筆者が提唱する文化モデルアプローチは、聴覚障害者を医学モデルや病理モデルで捉えるのではなく、手話や視覚重視といった聴覚障害者にとって重要なろう文化を基盤とするものである。

筆者は文化モデルアプローチと表しているが、英語ではさまざまな表記が使用されており、研究者の背景により違っている。以下に、文化モデルアプローチと同様にろう文化を重視した先行研究を紹介する。

まず最初に紹介するのは、筆者と同じく聴覚障害ソーシャルワークの研究をおこなっている Young の研究である。彼女は、聴者の親をもつ聞こえない子どもに早期介入する際には、文化言語モデル (a Cultural-linguistic Model of Deafness) による介入の必要性を論じている。これはバイリンガル・バイカルチュラル (bilingual / bicultural) と呼ばれるものであり、早期介入に必要なものとして次の 3 点を挙げている (Young1999 : 159)。

1) 手話へアクセスさせる

子どもが聞こえないと診断されたら、手話を使用するろう者やろうの子どもを紹介する。また、両親は手話を学び、子どもたちは手話でコミュニケーションする環境に馴染むことで、言語を獲得することができる。

2) 大人のろう者の役割モデルを示す

早期介入のプログラムにより、聴者家族は友人としてろう者と親しくなり、ろう者の生活を学ぶ機会をつくる。ろう者は聴者と同じように家族をもち、車を運転し、仕事をするといった当たり前のことを役割モデルから理解することができる。

3) ろう文化とデフコミュニティを教示する

聴者の親はデフコミュニティやろう文化について学ぶことになり、ろう者たちはマイノリティな文化コミュニティ (a minority cultural community) の構成員だということを理解することになる。

以上のように、Young は聴者の親の子どもが聞こえないと診断されたならば、1) 手話へ

アクセスさせ、2) 大人のろう者の役割モデルを示し、3) ろう文化とデフコミュニティを学ぶことができるようにするために、これらを理解した専門家の早期介入が必要であると述べている。この1)～3)はまさしくろう文化への橋渡しであり、筆者のいう文化モデルアプローチでもある。

次に、Sass-Lehrer によるデフ・メンターに関する研究を紹介する。デフコミュニティに属し、ろう文化の世界に生きる聴覚障害者をデフ・メンター (Deaf Mentor) と呼び、その役割と意義を示している (Sass-Lehrer2010=2015:137)。メンターとは良き指導者を意味する用語であるが、デフ・メンターにはろう文化への良き指導者として、次の3点に焦点をあてた対応が必要であるという。すなわち、①家族に対する ASL の指導、② ASL による子どもとの関わり、③ろう文化への理解と認識、およびデフコミュニティへの導き、である。デフ・メンターは聴覚障害児の家庭を定期的に訪問し、幼児や家族に対して相談や指導をこの3点に焦点をあてた対応でおこない、教育的心理的成果をあげているという。

具体的な例として、Sass-Lehrer はこのデフ・メンターの効果に関するデフ・メンター実験プロジェクト (Deaf Mentor Experiment Project) と名付けられた検証プロジェクトを紹介している。このプロジェクトでは、18 人の子どもを2グループ、すなわち、特別なトレーニングを受けたデフ・メンターのサービスを受けるグループと、サービスを受けないグループに分けて評価を実施した。調査者は、子どものコミュニケーションと言語、子どもと家族間のコミュニケーション、両親のろう者に対する認識と態度、といった要因に関わるデフ・メンターの効果を検証したのである。研究成果は、デフ・メンタープロジェクト (Deaf Mentor Project) に参加していた家族の子ども、すなわち、デフ・メンターのサービスを受けたグループの子どもは、このプロジェクトに参加していなかった家族の子どもに比べて、言語の発達が著しく、語彙量では2倍、また、コミュニケーション、言語、英語文法の検査の得点が高いことが示されたという。デフ・メンタープロジェクトに参加した両親は、プロジェクトに参加していない両親よりも、ASL (アメリカ手話) と SE (Signed English 英語対応手話) の両方をより自然に使用していることが示され、また彼らはろう文化や、ろうや難聴の人に対して肯定的な認識を持っていることも報告されており、早期介入プログラムのサービスの1つとして、デフ・メンターを含めるべきであると結論づけている。デフ・メンターはろう文化を基盤としたアプローチに必須の存在であるといえよう。

さらに Sass-Lehrer は、「3歳までを対象とした包括的プログラムは、学際的でコミュニティを基盤とした協働にもとづいており、また、家庭を中心とし、かつ発達的な視点を持った、子どもと家族への支援を含むものでなくてはならない。さらに、ろう者や難聴者を含む専門家は、家族との協力関係を強化し、家族の価値観と優れた点を反映した、文化的な対応にもとづく実践をおこない、子どもにとって重要なリソースとして家族を認識すべきである。」と文化的な対応を推奨している (Sass-Lehrer2010:2015:138)。

最後に、聴覚障害者のメンタルヘルスとカウンセリング領域でろう文化重視の視点を述べ

ている Glickman と Peters を紹介する。精神科医である Glickman は第一言語が手話であり、メンタルヘルスの治療を必要とする聴覚障害者がクライアントである場合は、手話ができる医者や看護スタッフを配置した治療環境をつくり、彼らの独自の文化であろう文化を理解した上での治療を実践すべきであるとし、それを積極的文化アプローチ（a Culturally Affirmative Approach）（Glickman2003：1-32）と名付けて提唱している。

カウンセラーの立場での Peters は、彼は聴者であるが、「ろう者を対象とするカウンセラーは、ろう文化を理解することが一番考慮すべき事柄（Awareness of the Deaf Culture）である。」と述べている（Peters 2007：186）²⁾。カウンセラー自身の文化背景がクライアントの文化と違う場合には、クライアントの文化を形成する背景を認識することは重要であり、聴者社会とろう者社会の相互作用をみることで、クライアントに関する重要な情報を得ることができるという。そして、ろう文化を高く評価し認識することで、クライアントとカウンセラーとの連携を強化できると説明している。

以上、ろう文化を理解することの重要性について、バイリンガル・バイカルチュラルによる早期介入、デフ・メンター、さらにメンタルヘルス、カウンセリング領域で指摘されている先行研究を紹介した。対人援助の専門領域としてソーシャルワークの分野でも同様に、ろう文化を重視する文化モデルアプローチは重要な理論であると考ええる。

4. 文化モデルアプローチのストレングス視点

4-1. ろう文化と聴文化の齟齬

次に、ろう文化を理解しないで聴覚障害者に対応する場合には、どのような問題点があるのかを例を挙げて説明する。まず、ろう文化と聴文化の間で齟齬が生じることを、ろう文化の構成要素として最も重要な手話に関して、先行研究から考察する。

医者が聴覚障害者の患者を治療する時の注意点の一つとして、Meador 他（2005：219）は英語と ASL（アメリカ手話）の理解の不一致から齟齬が生じることを、次のように例をあげて説明している。

診察時に手話通訳者がいなかったので、医者が “You may need surgery. (あなたはおそらく手術が必要でしょう)” と英語で書いたら、ろう者は “You need surgery in May. (あなたは5月に手術が必要だ)” と理解した。なぜならば、英語の “You may need surgery.” を ASL でそのまま表すと “You maybe need surgery. (あなたはおそらく (maybe) 手術が必要だ)” と表現される。英語の文章 “You may need surgery in May.” は、ASL では “You (in) May need surgery.” と訳し、理解されることもありうる」ために、読み書き英語が苦手な聴覚障害者は、このように手話に基づき英語を理解するので、筆談では誤解が生じることになるという。

日本語と手話に関しても同様なことはある。例えば、提出物を「3月中に提出すること」という場合、手話では「3月中頃」「3月中旬」の意味と解釈して、ろう者は3月15日に提出する。聴者は3月中だと3月31日までに提出すればよいと解釈する。また、「2時10分前に集合」という場合、聴者は1時50分に集合するが、手話では「2時10分の前」と表現して、ろう者は2時7分に行けばよいと解釈する。このように言葉の意味の捉え方に食い違いが生じることが多いという（関西手話カレッジ 2009：64）。他にも、ろう者が急に腹痛になり、通訳依頼する時間もなく一人で病院に行き、胃カメラ検査を受け医者と筆談した。診察の最後に、「自分は癌ですか」とろう者が聞くと、医者は「癌であるとはいいいきれない」と書いた。この日本語を手話で理解すると、「自分、癌、だから、言ってももう切れない。手術ができない」と理解してしまう（野澤 2001：18）。手話と日本語はそれぞれ別の独立した言語であることを理解できていないと、このような齟齬が生じてしまうのである（原 2015：36）。

手話が音声言語とは別の言語であることの理解ができていないと、以上の例のように誤解が生じ、聴覚障害者は英語や日本語の「理解力が悪い」とネガティブな評価を受けてしまいがちになる。音声言語との齟齬が生じるのは文化的ニュアンスの違いによりあり得ることであり、例えば、日本語では感謝の気持ちを「すみません」と表現することがあるため、外国人に対して筆者が感謝の気持ちとして“I'm sorry.”と言ってしまう、その場合の英語表現がおかしいと指摘を受けたことがある。言語が違う場合、このように齟齬が生じることは、その言語の背景が違うことから当然だと考えれば、手話を第一言語とする聴覚障害者が音声言語との間に齟齬が生じるというのは、聴覚障害者の理解不足ではなく、使用する言語の違いと捉えねばならないのである。

他にも、音声日本語と手話が混在することで両者のやりとりに齟齬が生じやすいということを検証した研究がある（広津・能智 2016：124）。ろう者に聴者がインタビューした内容を会話分析し、ろう者と聴者が音声言語と手話を介して対話をする際に生じる齟齬やそれに対する修復についての分析をおこなった研究である。日本手話を介した場合、ろう者はいきいきと語れる一方、聴者の側の理解と表出には滞りがあり、インタビュアーとしての機能も低下する。また、聴き手が「ろう者」か「聴者」といったカテゴリー分けをしてしまった場合、話し手の意図や思いが伝わらず、会話が滞ってしまう傾向がある。そして、ろう者と聴者の間でなされる手話インタビューは一種の異文化コミュニケーションであり、感覚的なものも含めた複数の表現の活用や、インタビュー全体に注意を向けることで相互理解が促進されるという。

ろう文化は視覚重視の文化であるので、挨拶する場合、手を挙げる動作でおこなうことがあるが、例えば、この挨拶方法を知らない職場の上司が、「上司に向かって失礼だ。挨拶もできないのか。」と誤解してしまうこともある。

以上のことから聴覚障害者を対象とする専門職は、手話使用者のろう文化をよく理解し

た上での関わりが必要であり、ろう文化を知らない聴者に対して代弁することが求められることになる。

4-2. ネガティブからポジティブ視点への転換

次に、相談支援においてクライアントである聴覚障害者を、従前の医学モデルや病理モデルといったネガティブな捉え方ではなく、ろう文化視点すなわち文化モデルで捉えると、ポジティブな捉え方に転換することができることを例を示し考察を試みる。

筆者は聴覚障害者への相談支援をおこなっている職員を対象に、聴覚障害者についての障害者観を調査するため、ろう文化についての認識や聴覚障害者に対しての視点のあり方を考察する調査研究をおこなった。その研究方法は、①聴覚障害者についてよく知らない聴者に対して、聴覚障害者の特性をどのように聴者に説明するかについてまず記述してもらい、次に、②文化モデルアプローチについて筆者が講義³⁾をおこなった後に、③最初にしたネガティブな記述内容をポジティブな視点に転換するワークショップを実施した（原 2016）。

ネガティブからポジティブな視点に転換した具体例のうち数例を表1に紹介する。左側がネガティブ視点の記述で、右側はポジティブ視点に転換した記述内容である。

表1 ネガティブからポジティブに変更した記述内容

ネガティブな記述	ポジティブな記述
• コミュニケーションがとれないため、周りの人と人間関係をうまく築けない人がある。	→ 周りとのコミュニケーション手段が異なるため、周りの人と人間関係がうまく築けない人があるが、周りの人が手話ができたなら、コミュニケーションがスムーズにできる。
• 長い文章の読み書きは苦手な人が多い。	→ 短い文章ならわかる。手話では十分に語ることができる。
• 日本語が苦手である。	→ 手話が第一言語である。
• 筆談ではわかりにくい人がある。	→ 日本語と手話は別の言語だから、筆談ではわかりにくい人があるが、手話ならばわかる。
• 健聴者文化が身についていない。	→ ろう文化の中で育っているもので、ろう文化は獲得できている。
• 長い間積み重ねられる情報が、聞こえる人と比べて非常に少ない。	→ ろうの社会や当事者団体などでの手話コミュニケーションから、いろいろな情報は積み重ねられて、そこからマナーも身についてくる。

表1に示したように、ネガティブな記述は聞こえることが当然であるという聴文化に基づく内容であり、「……ができない」「……しにくい」「……が苦手」といった表現となっている。聴覚障害者についての正しい知識を持たない聴者がこれらのネガティブな説明を聞くと、聴覚障害者は能力の低い劣った人たちだという間違った理解につながってしまう。

専門的文献に記述されろう者の傾向についての表現をまとめたLaneによると（Lane1999：36＝2007：66）⁴⁾、「非社会的、概念的思考の弱さ、攻撃的、無責任、情緒不安」など、ネガ

ティブな表現が多く文献に使われていたと紹介している。

Lane の指摘したネガティブ表現も筆者の調査時のネガティブ記述も、聴覚障害者の独自のろう文化を基盤にした文化モデルで捉え直すとポジティブな記述に転換できる。これらの記述の変化を考察すると、具体的な文化モデルアプローチの内容を明らかにすることができ、且つ、文化モデルアプローチは聴覚障害者についての障害者観をポジティブに捉えることが可能なアプローチであることが考察できた。クライアントは問題だけでなく強さをもつといったソーシャルワークのストレングス視点と同様に、聴覚障害者をポジティブに捉えるということは、エンパワメントできるという意味では同じであるといえよう。文化モデルアプローチは聴覚障害者のストレングスをより強固にアセスメントすることができるのである。

5. おわりに

本稿は、手話をコミュニケーション手段とする聴覚障害者をクライアントとする聴覚障害ソーシャルワークにおいて、彼らの独自のろう文化を重視する視点でのアプローチである文化モデルアプローチについて、先行研究のレビューとネガティブ視点からポジティブ視点への転換例を中心にまとめたものである。

最後に、本稿で紹介した先行研究とは少し違った意見を述べている Pray らの指摘を紹介し、問題提起をして終わりとする。ソーシャルワーカーとしての立ち位置での Pray らの指摘である。現在、デフコミュニティでは補聴器などの補助器具の技術が進み、人工内耳装着児童が急激に増加傾向にあるとともに、ASL（アメリカ手話）の受容、ろう文化の認知が増大してきている状況にあるという。人工内耳の発展には擁護する者と批判する者が存在し、聞こえない子どもの教育方法についてもさまざまな議論が続いている。このような状況においては、ソーシャルワーカーやすべての専門職は、聞こえない子どもをもつ親や聴覚障害者に対し、人工内耳装着を勧めるだけではなく、手話やろう文化に関しても偏りをもたずに情報提供するスタンスであらねばならないと主張している（Pray & Jordan2010：168）。人工内耳を否定するのでもなく、またろう文化に偏ることもなく、双方の情報提供をソーシャルワーカーはおこなうべきであるということである。

筆者もソーシャルワーカーの立ち位置としてこの意見に賛同するが、わが国の場合はあまりにもろう文化に対する認識が低いため、あえてろう文化を基盤とする文化モデルアプローチを提唱しているのである。

わが国において、マイノリティな文化も平等に尊敬の念を得ることができるよう、また、マイノリティの権利を擁護する議論として、このユニークなろう文化が考慮されるべきであると考えている。ろう文化に関して将来的にどのような進展があるのかその予想は困難であるが、現時点では聞こえない人たちの独自の文化として捉え、かつ彼らを支援する専門職は聴覚障

害を医学モデルや欠損モデル・病理モデルではなく、ポジティブな捉え方としての文化モデルアプローチの有効性を理解すべきであると考えている。

本研究は、2013～2016年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C（研究代表者：原 順子）課題番号25380811「聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの研究」の研究成果の一部である。

注

- 1) ろう文化に関する海外の文献にも、文化研究での文化のとらえ方は説明しきれないものであるとの記述がある（Johnson, J. R.2009：69）。
- 2) Peters は聴覚障害者を対象にカウンセリングする場合に考慮すべき事柄（Considerations）として、①ろう文化の認識（Awareness of the Deaf Culture）、②ノンバーバルな行動への注意（Attention to Nonverbal Behavior）、③健康への焦点（Focus on Wellness）、④守秘義務（Confidentiality）、⑤手話通訳者（Sign Language Interpreters）、以上5点を挙げている（Peters2007：186-188）。①ろう文化の認識は筆者の文化モデルアプローチと同じである。ろう文化を基盤と捉えることで、聴覚障害者の特性をポジティブに捉えた視点になるといえよう。
- 3) 筆者がおこなった講義での文化モデルアプローチの説明は、医学モデルや病理モデル、欠損モデルから、ろう文化という独自の文化をもつという文化モデルへの変遷に関する説明をおこない、ろう文化視点を基盤にした文化モデルアプローチの障害者観について講義した。詳細は（原2016）を参照されたい。
- 4) 論文等に記載されているろう者の特性（Lane1999：36）

社会性	誉められたがる、非社会的、子どもっぽい、排他的、競争好き、良心が弱い、騙されやすい、依存的、反抗的、無責任、孤立している、道徳性の未発達、役割（融通がきかない）内気、従順、暗示にかかりやすい、非社交的
認識面	概念的思考の弱さ、具体的、疑り深い、自己中心的、失敗の外部化、失敗の内面化、洞察力の貧しさ、内省なし、言語なし、言語わずか、機械に弱い、愚直、理性不十分、自己認識希薄、抜け目ない、思考力不十分、世事に疎い、無知
行動面	攻撃的、中世的、用心深い、快楽的、未熟、衝動的、進取的精神の欠如、無関心、運動神経が鈍い、不十分な人格形成、独占欲が強い、柔軟性がない、ぐずぐずしている、頑固、疑り深い、優柔不断
情緒面	不安の欠如、うつ的、情緒不安、情緒的未成熟、共感の欠如、かんしゃく持ち、落胆しやすい、怒りっぽい、気まぐれ、神経症的、誇大妄想的、情熱的、精神病的反応、まじめ、神経質、冷淡

〈筆者による訳〉

この表は1970代1980年代の20年間に「ろう者の心理学」に関する精神測定的研究の論文等（350以上の論文、本）に記載されているろう者の特質に関する記述をまとめたものである（Lane1999：35＝2007：64）。

引用文献

Glickman, Neil (2003) Cultural Affirmative Mental Health Treatment for Deaf People: What it Looks Like and Why it is Essential, *Mental Health Care of Deaf People — A Culturally Affirmative*

- Approach*, Lawrence Erlbaum Associates, 1-32.
- 原 順子 (2015) 『聴覚障害者へのソーシャルワーク ― 専門性の構築をめざして』 明石書店.
- 原 順子 (2016) 「聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの一考察 ― 具体事例から考察する文化モデル視点への転換 ―」 『四天王寺大学紀要』 第 62 号, 265-275.
- 広津侑実子・能智正博 (2016) 「ろう者と聴者の出会いの場におけるコミュニケーションの方法 ― 手話を用いたインタビューの会話分析から」 『質的心理学研究』 (15), 124-141.
- Holcomb, Thomas K. (2016) Deaf Culture, *Deaf Studies Encyclopedia*, Sage reference, Vol. 1, 161-167.
- Johnson, John R. (2009) Toward a Cultural Perspective and Understanding of the Disability and Deaf Experience in Special and Multicultural Education, *Remedial and Special Education*, Vol.30, No.2, 67-83.
- 木村晴美、市田泰弘 (1995) 「ろう文化宣言 ― 言語的少数者としてのろう者」 現代思想編集部編『ろう文化』 青土社 (2000).
- 木村晴美 (2007) 『日本手話とろう文化 ろう者はストレンジャー』 生活書院.
- 木村晴美 (2009) 『ろう者の世界 続・日本手話とろう文化』 生活書院.
- Ladd, Paddy (2003) Understanding Deaf Culture In Search of Deafhood Multilingual Matters Ltd (= 2007, 森 壮也監訳『ろう文化の歴史と展望 ― ろうコミュニティの脱植民地化 ―』 明石書店).
- Lane, Harlan (1990) Cultural and Infirmity Models of Deaf Americans, *The American Academy of Rehabilitation Audiology*, 11-26.
- Lane, Harlan (1999) The Mask of Benevolence Disabling the Deaf community Dawnsign press (= 2007, 長瀬 修『善意の仮面 ― 聴能主義とろう文化の闘い ―』 現代書館)
- Leigh, W. Irene (2009) *A Lens on Deaf Identities*, Oxford University Press.
- Meador, H.E. & Zazove, P. (2005) Health Care Interactions with Deaf Culture, *The Journal of the American Board of Family Practice*, Vol.18, No.3, 218-222.
- 日本文化人類学会編 (2009) 『文化人類学事典』 丸善株式会社.
- 野澤克哉 (2001) 「ソーシャルワーク概論」 『聴覚障害者のケースワークⅣ』 聴覚障害者問題研究会.
- Padden, Carol & Humphries, Tom (1988) *Deaf in America: Voices from a Culture*, Harvard University Press; Reprint (1990).
- Padden, Carol (1989) 「ろう社会とろう者の文化」 Sherman Wilcox *AMERICAN DEAF CULTURE: An Anthology* (=2001, 鈴木清史・酒井信雄・太田憲男訳『アメリカのろう文化』 明石書店).
- 関西手話カレッジ編 (2009) 『ろう者のトリセツ聴者のトリセツ』 星湖舎.
- Parasnis, Ila (1996) On Interpreting the Deaf Experience within the Context of Cultural and Language Diversity, *Cambridge University Press*.
- Peters, W. Scott (2007) Cultural Awareness: Enhancing Counselor Understanding, Sensitivity, and Effectiveness with Clients Who Are Deaf, *Journal of Multicultural Counseling and Development*, Vol.35, 182-190.
- Pray, Janet L. & Jordan, I. King (2010) The Deaf Community and Culture at a Crossroads: Issues and Challenges, *Journal of Social Work in Disability & Rehabilitation*, 9: 168-193.
- Sass-Lehrer, Marilyn (2010) Early Intervention, Marschark, Marc & Spencer, Patricia Elizabeth *Oxford Handbook of Deaf Studies, Language, and Education*, Vol.2. (=2015, 四日市市章他監訳『デフ・スタディーズ ろう者の研究・言語・教育』 明石書店).

澁谷智子（2009）『コーダの世界 手話の文化と声の文化』医学書院.

手賀尚紀・澤田善太郎（2015）「障害問題と異文化」『広島国際学院大学研究報告』第48巻, 75-86.

渡辺 靖（2015）『〈文化〉を捉え直す——カルチュラル・セキュリティの発想』岩波新書.

山本登志哉（2015）『文化とは何か、どこにあるのか—対立と共生をめぐる心理学』新曜社.

Young, A. M. (1999) Hearing parents' adjustment to a deaf child—the impact of a Cultural-linguistic model of deafness, *Journal of Social Work Practice*, Vol.13, No.2, 157-176.

